

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The structure and development of children's utterance : A study by showing a set of 3 pictures to each

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大久保, 愛, OKUBO, Ai メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001772

幼児の発話の構造と発達

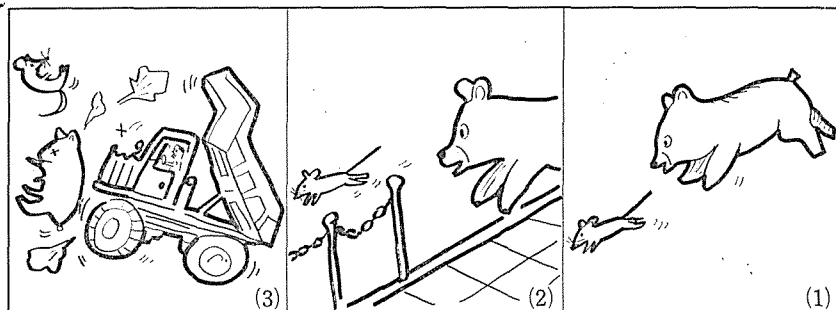
——三こまの絵を見せて話させた場合——

大久保 愛

1 目的と対象

この小研究は、国立国語研究所報告50『幼児の文構造の発達』（秀英出版・昭和48年3月、大久保愛担当）に用いた資料「幼児のことばカード集1～6」より、三こまの絵を見て幼児が話したもののうち、「くまとねずみ」を用いて、幼児の発話（書きことばでは文章）の構造と発達を見たものである。

発話（utterance）とは、「同一の個人による任意の長さの談話で、前とあととが沈黙によって区切られ、文法的に独立性をもっているものをいう。一つの発話の一つの文から成っていることもあり、二つ以上の文をその中に含むこともある。また、発話という単位は、分析をなんらほどこしていない対象、つまり、そこから分析が出発すべき素材と考えられており、厳密な規定を伴うことなく用いられている場合が多い。」（安井稔編『新言語学辞典』研究社、昭和46年）と書かれているものがあるが、この研究では、調査者の返答とか発問によって、幼児の発言がたち切られるまでを一発話と見て、その構造と発達を調べてみようとしている。調査者のあいづちは問題にしていない。この調査者とは、



幼児から話をひきだそうとして、発問をしたりして、幼児の相手をつとめているもので、ここでは筆者である。

「くまとねずみ」の絵を図示する。(282ペ)

対象幼児は、東京の幼稚園、保育園各二園ずつ、計四園である。年齢と人数は次のようである。

年少児（3歳3～4歳4）69名——4クラス

年中児（4歳1～5歳6）121名——6クラス

年長児(注)（5歳5～6歳6）115名——4クラス

(注) 幼稚園・保育園の年齢分けは、通常、年少児・年中児・年長児というふうによ
ばれている。そこでここでもこの用語を用いた。3歳児クラス・4歳児クラス・5
歳児クラスと同じ意味に用いている。

これら幼児を調査者のいる別室に連れてきて話させ、それを録音し、文字化
したもののうち、「くまとねずみ」の絵について話した部分が、前にものべた
が、この小研究の資料なのである。

2 幼児の絵に対する反応（話）のタイプ

「くまとねずみ」の三こまの絵について話すように求められたら、筆者だっ
たら次のように説明する。(数字は三こまの絵の順を示す)

(1)くまがねずみを追いかけていたら、(2)ねずみが道路に飛び出たので、くま
も追いかけて道路に出たら、(3)ダンプカーが来て、二匹ははねとばされた。

(1)くまがねずみを追いかけています。(2)そしたら、ねずみが道路に飛び出た
ので、くまも追いかけて道路に出ました。(3)そしたら、ダンプカーが来たから
二匹ははね飛ばされてしまいました。

この原因→結果を含む三こまの絵を、幼児は以下にのべるようなタイプで話
しているのである。

2.1 「この絵はどういうお話か」という調査者の発問に対して、だまって話
さない幼児が、年少・年中児にはいるが、年長児にはいない。けれど、「ワ
カラナイ」と言って、それきり黙ってしまう幼児が、年中・年長児にはい
る。また、「ワカラナイ」とは言うが、のち、調査者の発問を待って話しは

じめる幼児もいる。

2.2 調査者の「じゃ、この絵は何でしょうね」という発問に対して、まず、「コレ?」「コレ コッチカラ?」とか、「ネズミト ナンダ コレ?」という質問を調査者にしてから、おもむろに話し出す幼児がいる。この中には、絵の中の動物その他、わからないことをたしかめるためにたずねる幼児と、調査者の「これは何の絵でしょう」の意の「これは?」に対して、必ず「コレ?」という聞きかえし質問をする(エコラリー)習慣の幼児がいる。前者は年少児に少なく年中・年長児に多い。エコラリーの例は次のようである。以下にのべる用例のひらがなは調査者、かたかなは幼児。幼児の用例の中のかっここのものは、録音が聞きとりにくかったが、このように聞こえたというもの。文末に;のついている文は成分の倒置あるいは補足のしるしである。〔 〕は注である。

○これは?/コレ? ブタ。/これは?/コレ? ネズミダヨ。(年少, 3歳8)

○じゃ これは? こっちからよ。/コッチ?/そう。(年中, 4歳3)

○こんど これは?/コレ? クマサンガ ネズミニ〔を〕オйкаケテンノ。(年中, 4歳11)

次のような例も見られる。必ず「コレ?」と念を押して聞くのである。

○こっちらからずっとお話してみて。/コレハネ ネズミガ ニゲテネ クマガ ニゲタノ。/それで?/コレ?/うん。/ソレカラ ネズミガネ ニゲテ ソシテ クマモ ニゲタノ。/それで?/コレ? ソレカラ コレハネ ウントネ ネズミガ ウエニ アガッテ クマモ ウエニ アガッチャッテ ソシテ ダンプカー キタノ。(年中, 4歳1)

2.3 一発話が終わるとだまってしまって、調査者の発問を待つて次の話を続けるという幼児がいる。一発話で話が十分みたされていないので、調査者が発問するのだが、調査者の発問が二回、三回ある場合もある。調査者が発問せずだまって待っていると、間はあるが、ぼつりぼつり話す場合もないことはないが、一語文とか短い文の一発話だけで幼児がだまってしまう場合が多い。調査者の発問が入る形式は、年少児に多く、ついで年中児で、年長児には少ない。内容を十分にはのべられなくても、話そうと思っていることを二つあるいは三つ以上の文にして、一気に話すのが年長児なのである。どのようなタイプか年少・年中・年長児の例をあげる。

○クマガ ネジュミヲ タベヨウト オモッタノ。／そしたら？／センガ チュエ
テ(ル) トコ アブナイカラ トオレナイカラ ハジッコカラ イッタノ。／で、
どうなったの？／ソレデ ダンプカー ツナヲ ダシテ コレヲ ヒックリガエシ
チャッタ。(年少, 3歳8)

○ネズミガ サキ イテネ オイカケテ キタノ。／何が？／ウント クマ。／追い
かけてどうした？／ネズミガ ココカラ ピョント トンダノ。(年中, 4歳3)

○ジドウシャガ コワレチャッタ。／こっちからよ。／コッチカラ？／うん。／コレ
ガ ミタノ。／くまが見たのね。何をみているの？／コレ。／これって何？／ネズ
ミ。／うん。／クマガネ マタネ ネズミン トコ ミテンノ。ジドウシャガ コ
ワレテンノ。(年長, 5歳8)

もちろん、2.2の幼児の質問のあるものにも、この2.3のような調査者の発
問もある。つまり、両方を持っているタイプの反応(話)もある。

2.4 その他、変わった話し方のタイプを見ると、次のようである。

2.4.1 全体が質問的な言い方

○サン。コレ ナンダロウナ？／くまね。／クマ？／ん。／クマガネー(コレ)ネズ
ミ？／うん。／ソイデ トラックニ クマガ ヒカレチャッタノ？(年少, 4歳
5)

2.4.2 話がそれていくもの

○エートネ…／これは何？／エット ブタ。／くまね。これは？／エートネ クサ。
／くまとねずみがどうしたんでしょう。／エットネ ナカ(ニ) ハイッテナノ。ネ
ズミ； ボクンチニ ネズミイナイ。ネズミ イ(ジ)ワルサ スンノ。(年少, 3
歳5)

2.4.3 絵に依存した話し方

○クマガネ コウ イテネー エート ウサギガネ コウ トコ イッチネ ウーン
コウネ (スグ) ココへ キテネー ウー クマガ ミテネー ウーン クマトネ
エート ウサギガネ コウイウニ ナッチャッタノ。(年少, 4歳4)

○アノネ クマガ ネズミヲ オイカケテネ ネズミガ ココニ イッチネ ネズミ
ト クマガ トラックニ ハネトバサレチャッタノ。(年長, 6歳5)

下線のところを「どうろ」とか、「じどうしゃにはねとばされた」という
ふうにとことばで言わないで、絵に依存して、指示語の「ここ」「こう」など
を用いて話すのである。まだ語彙の発達が不十分だということもあろう。

このような場合幼児の発話がいくつかから成立しているか、発話を構成する文
数はいくつか、文と文の連結のしかたはどうか、を見ていくことにする。

3 いくつかの発話と文から成っているか

幼児は、「くまとねずみ」の絵をいくつかの発話で話しているか、その発話は、何文から成っているかを調べてみる。

3.1 一発話一文で話している——「ワカラナイ。」「ジドウシャ。」というように一語文で話している場合もあるが、大部分が複雑な一文から成っている。前にのべた調査者の発問が入らない形式である。年長児に多い。

- チツチャイ クマガネ ネズミラ ミツケテネ オチョラカラ トンデネ ネズミモ トンデネ オイカケテネ トラックガ キタノ。(年少, 3歳11)
- コレハネ クマサンガ ネズミ イツピキネ ツカマエヨウト オモツテネ, シタラネ ネズミガ ココへ イツチャツカカラネ クマサンガ オコツテネ ソシテネ クマサンガネ トラクト ブツカッタノ。(年中, 5歳)
- エートネ クマガ ネズミ オッカケテル トコニ トラックガ キテネ クマガ ブツカツテネ ネズミモ ブツカツテネ トネ ト ケガー シタノ。(年長, 5歳11)

最後の年長児の例は、「クマガ ネズミ オッカケテル トコニ」と連体修飾語形式を用いて、要領よく簡潔にのべている。

3.2 一発話二文で話している——これも年長児に多い。接続詞で文と文が連結されるのである。次の年少児のような例は少ない。

- コレネ プタ ウントネ クマチャンガネ マツターツテ。ジドウチャガ アブナイ ピューイダツテ。(年少, 3歳10)
- コレハ ドンクマサンガネ ネズミ タベエルトネ ウントー ウントー ネズミ オイカケテルノ。ソイデ ダンプカーガ キテ アブナイーツテユツタラネ ヒカレチャツタノ。(年中, 5歳1)
- ソレハネ クマガネ ネズミガ[を]ネ オイカケテルノ。ソウシテネ クルマナンカ ハシツテル トコニネ シラナイデ デタカラネ ウント ダンプカーニ ブツカツチャツタノ。(年長, 6歳4)

3.3 一発話三文で話している——これは年長は少なくなってくるが、年中は3.1, 3.2に劣らず使用している。

- ウントネ クマガネ ハジメネ ネズミ ツカマエル トコダツタノネ。ネズミ ツカマエナカッタノ。ソイデネ ジドウシャガネ アレ フタツ トロウト オモツタラ トレナカッタノ。(年少, 4歳1)
- ウサギガ イツカカラネ ウーン クマガ ツイテ キタノ。ソイデネ ウサギガ

ネ ドウロニ カケダシタカラネ クマモネ カケダシテ イッタ コト。ソイデ
ウサギガネ ジドウシャン トコネ コウ イツラネ ヒカレタカラネ ウーン
ト クマガネ ンー スワッテタラ ブツカッテネ ウーウー トランクノ オジ
サンガネ ココニ ジャーッテ シチャッタノ。(年中, 5歳3)

- クマガネ ネズミヲ オイカケテンノ。ダンブカーニ クマ ヒカレチャッタノ。
ソウシタラ トビアガッチャッタノ。(年長, 5歳8)

3.4 一発話が四文以上のもの——六文の例をあげる。年中児は、もの名前
にのみ反応している。年長児のは、くまは「大きい」、ねずみは「小さい」と
修飾したり、ねずみの走る様子を「チョコチョコ」と表現したりして細かく
話している例である。

- コレ クマデショウ。／うん。／ネズミデショウ。／うん。／クマデショウ。／そ
うね。／ネズミデショウ。／うん。／クマトネ ジドウシャトネ ネズミガ イル
ノ。／くまとねずみがどうしたかお話できる？／デキナイ。(年中, 5歳2)

- アノネ クマガネ ネズミヲ タベヨウト シテネ アノネ クマガ オッカケテ
イッタんだって。ネ オオキイカラ アノネ カケンノガ オソカッタんだって。
ソイデネ アノネ ネズミハ チッチャイカラ チョコチョコネ カケテ イッタ
んだって。ソイデ オオドオリニ デタんだって。ソイデ アノネ クマハネ ジ
ドウ トラックニネ ブツカッテネ アノネ ネズミハネ クマノネ ミミノ ト
コロヲ ブツカッテネ アノネ ジドウシャノネ ウシロヘネ アノネ アノネ
ノッカチャッタノ。ソイデネ アノネ クマハネ アノネ ヒカレチャッタ(ノ)。
(年長, 5歳11)

3.5 二発話からなっているもの——これには、(a)まず調査者に質問してのち
話しはじめ、のちの発話は一文から二文、三文以上八文からなるものであ
る。

- コンド コレ？／こっちからよ。／ントネ クマガネ ネズミ オイカケテネ ネ
ズミガ ココカラ ピョント トンデネ ソレデネ クマガネ トベナインデネ
ソレデ オリタラ ドッカーン。(年中, 4歳3)

(b)調査者の発問が入って、発話が二つになっているもの。発話を構成してい
る文は、一文から五文までである。

- エットネ ブタ。／ねずみなのね。くまとねずみがどうしたの？／ウントネ セン
ソウン トキニネ ハシッテネ アルイテ(ル) モッテルノ。ソレデネ ジドウシ
ャニ シカラレタノ。[ひかれたこと] (年少, 4歳1)

- クマガネ ネズミヲ オイカケテル ドコ。／それで？／ソイデネ ネズミガネ
ミチン ドコ アルイテタラネ トラックガ キテネ ウント コグマトネ ネズ

ミガネ コロンジャッタノ。(年長, 5歳7)

(a)の質問がはじめにある例は年長児に多く、発問の入る例は年少・年中児に多い。

3.6 三発話以上からなるもの——年長児には少なくなる。年中児は五発話以上のものは少ない。年少児は、年中・年長児より多い。(表参照)

○じゃこの絵は? / ナニカ ワカンナイ。 / くまのよ。 / クマ。コレモ? / ねずみ。 / ネジュミ。ソノ ツギハ コレ。クマ; コレハ? / どうろ。 / (ロ)ウロ? ジャ コレハ? / ねずみ。 / ネズミ。コレハ? / なんてでしょうね。 / コレ ジドウシャ。コレ ヒカレチャッタノ。ネズミガ; ソウナノ。(年少, 3歳7)

年少児は前にもべたが三こまの絵で表わされている話の筋に反応するよりも、描かれている絵の「もの」に反応する傾向がある。そして、一発話が短かく、文も単文なのである。年中児にも次のような例が見られる。まだ、幼児音のめだつ幼児である。

○アッ! クマー。 / こっちからよ。 / ドングマタン? / うん? / ドングマタン? ネズミ ツカマエテンノ, コレ? / そうらしいわね。で、どうしたの? 「ボクノ オトモダチ」 ッテ ユッテンノカナ? アッ! ダンプカー オチテンノ コレニ ダンプカーヲ。オ(チ)テンノ。 / 押してるの? / ウン。 / どうして押してるの? / アラッ! コレ ドングマタン ドウチタノ, コレ? / どうしたと思う? / ネズミタント ドングマタン ドウチタノ? / どうしたんでしょう? / ダンプカーニ ウントー「トマ トマレ」 ッテ ユエチャッタノカナ? (年中, 4歳1)

幼児が三こまの絵を見て話す場合、以上のような発話と文の形式をもって話しているのである。これは、「くまとねずみ」の絵ばかりでなく、同じときに行なったもう一つの三こまの絵「男の子と花」の場合にも、似た傾向が見られた。(「男の子と花」の三こまの絵図は、『幼児の文構造の発達』14ペ参照)。年齢別に発話数と文数の割合をパーセントにあらわして、次表で比較する。

年齢別発話数と文数の割合 (注) ゴチャックの数は1割以上の人数が使用のもの

発話数	文数	年少児		年中児		年長児	
		くまとねずみ	男の子と花	くまとねずみ	男の子と花	くまとねずみ	男の子と花
		%	%	%	%	%	%
1		8.9	10.3	14.0	14.0	30.9	31.6
2		7.1	5.2	12.3	7.0	22.6	16.7

1	3	7.1	1.7	14.0	14.0	10.4	5.2
	4	7.1	1.7	1.8		6.1	5.2
	5	1.8		0.9	0.9	3.5	1.8
	6		1.7	0.9	1.8	2.6	0.9
	7						0.9
	計	32.0	20.6	43.9	37.7	75.6	62.3
2	2	8.9	13.8	14.0	15.8	9.6	14.0
	3	5.4	10.3	6.1	12.3	3.5	10.5
	4	1.8	1.7	2.6	5.3	7.0	5.3
	5	1.8		1.8	2.6	0.9	0.9
	6			0.9	0.9		
	7			0.9			
	8			0.9			
	計	17.9	25.8	27.2	36.9	21.0	30.7
3	3	8.9	13.8	4.4	2.6		1.8
	4	1.8	1.7	4.4			1.8
	5	1.8	5.2	2.6	1.8		0.9
	6		1.7	0.9			
	8		1.7				
計	12.5	24.1	12.3	4.4		4.5	
4	4	7.1	12.1	2.6	6.1	0.9	
	5	5.4	1.7		4.4		
	6	1.8	1.7	0.9	0.9		
	7	1.8		2.6	0.9		
	13			0.9			
計	16.1	15.5	7.0	12.3	0.9		
5	5	3.6	8.6	1.8	0.9		
	6	5.4	1.7		1.8		0.9
	7				0.9		
	10	1.8					
計	10.8	10.3	1.8	3.6		0.9	
6	6	3.6	3.5				
	計	3.6	3.5				
7	7	3.6			0.9		
	8	1.8			0.9		
	計	5.4			1.8		
	8						

8	10 計			0.9	0.9		
				0.9	0.9		
13	13 計	1.8					
		1.8					
「わからない」				6.1	2.6	2.6	1.8

表から言えることをまとめてみると、発話と文数については次のようである。年長児は一発話を一文で話すのがいちばん多く（一文と言っても一語文でなく、長い文である）、ついで一発話二文であり、それも、せいぜい二発話四文までのところに集中している。一発話ですませている人数が七割を占めているのである。

年中児にもそのような傾向はあるが、一発話一文は年長よりうんと少なくなっている。一発話二文も年長児より少ない。そして、それらと同じくらい一発話三文、二発話二文がある。広がりからいうと、八発話十文と、年長児よりばらつき幅が広い。（年長児は五発話六文までである。）

年少児になると、一発話一文、二発話二文、三発話三文、四発話四文というのが同じくらいに多いほうで、十三発話十三文などというところまで広がっている。発話の構造が安定していないのが特色である。一文も短いということになろう。

4 文と文の連結の構造

文と文を連結する場合、接続助詞で連結する場合と、接続詞である場合と、両方を用いて連結する場合の三とおりがあがる。幼児はどのような連結のしかたを用いて話しているのだろうか。「くまとねずみ」の資料をも使っている『幼児の文構造の発達』（前出）で調べた「複文の構造と用法」「接続詞の用法」から、接続助詞と接続詞についての幼児の用法を見ていくと以下のようなものである。

複文構造の場合、①一つの接続助詞によって連結するときの接続助詞は、年齢を問わず「て」が多用され、ついで、「から」で、但し、年少は「から」の使用が少なく、「どうして？」という調査者の質問に対して「アブナイカラ。」「ヤサシイカラ。」という理由文（あるいは「から文末」とも言える）を用いて

答えているのである。ついで、年齢を問わず「たら」（これも仮定の使用はわずかで、時間的に前のことか理由を表わす）を用いている。ついで、「けど」は、年少・年中児は使用が少ないが、年長児は用いている。「ので」「のに」は年中・年長児のうちわずかな幼児しか使用していないのである。

(2)二つの接続助詞によって文が連結されている場合も、やはり「～て～て～」の連結のしかたが多いのである。意味的にみても、時間的順序・並列の言い方が多い。原因結果をあらわす場合も、「て」を用いているのである。

接続詞については、本来の意味で接続詞を使っている場合もちろんあるが、間投詞的使用、別の意味のところを使用という例があんがいある。接続詞の中でも一番よく使用している「それで」は、AだからBという原因と結果を結合する意味に使う場合に用いるのが正しいのだが、「そして」「それから」「そしたら」「その他」の意味のところに使っていたりする。

接続助詞および接続詞の両方を使っている場合のうち、「て+それで」の形式については、『「ので」の接続助詞を使用する前の過渡的現象か、あるいは、「て」で「ので」の代用をさせ、「それで」は間投詞的利用に過ぎないのか』などという意味のことも前書(218ページ)でのべたが、この「て+それで」の形式を年長児はよく使用して、文を連結させているのである。次に、「くまとねずみ」の絵を見て話した場合の文の連結のしかたを、例をあげてみることにする。下線の部分が連結のために使用された接続助詞及び接続詞である。

4.1 接続助詞も、接続詞も使用しないもの——年少・年中児に多い。

○コレ クマ。コレモ クマ。コレモ クマ。(年少、4歳2)

○カケテル トコロ。／これは？／ジドウシャ ハシッテル トコロ。(年中、5歳2)

○クマガネ マタネ ネズミン トコ ミテンノ。ジドウシャガ コワレテンノ。
(年長、5歳8)

絵を関係づけて話さず、ことがらを並べているだけなのである。

4.2 接続助詞を使用しているのが一つきりのもの——この三こまの絵の話としてはこれだけでは不十分な言い方である。(以下の用例の接続助詞のところにつけた下線は、いわゆる重文(一本線)と複文(二本線)のちがいをあらわしたものであるが、ここではくわしくのべない。文の構造がわかりや

すく見られるためにつけたに過ぎない。)

○ナンカ アッターッテ サガシニ イッタノ。(年少, 4歳)

○「ダンプカー バック シュルヨ」ッテ ユッテカラ コッカーラ デテキタノ。ウ
シャギガ。(年中, 4歳6)

4.3 接続助詞を二つ以上使用しているもの——これには、「～て～て～」あるいは「～て～たら～て」とか、「～て～たら～けど～て～」などがある。文の構造が複雑になってくるのである。年長児にこのような例がよく見られる。一発話一文、一発話二文が年長に多かったのと通じている。

○サンパンメ?/うん。/サン。サキーネ クマガ ネズミヲ オイカケテネ ウー
ネズミガ イテ クマガ キテネ ネズミネ ウント ウント トラックガ キタ
カラネ ウント ズットネ タッタラ ツカマッチャウカラネ ニゲテネ クマモ
キテネ フタリデ ブツカッチャッタ。(年長, 6歳3)

この形式の発話は、年中児にもある。

○コレハ ハジメ ネズミサンガ イテネ コンド クマサンガ キテ ネズミサン
ガ アマリ オオキイノデネ アノ クジラカト オモッチャッテ ニゲテ コン
ド クマサンガ オイカケテキ トラックガ キテネ キヤーッテ ネズミサンガ
イッテ ウシロカラ クマサンノ ウシロカラ アノ トラックガ ドカアント
ブツカッチャッタノ。(年中, 5歳2)

年少児には、このように複雑につながっている連結の例は少なく、「～て～て～」の使用例のみである。

○ウントネー クマガネ オイカケテ ネズミガ ニゲテネ ……オウチノ (トコ)
ハイッタノ。(年少, 4歳4)

4.4 接続詞のみで連結しているもの——これは年長・年中児に比べると、年少児のほうに多い。

○クマサントネ ウサチャンガネ ントネー ボールゴッコ シテル トコ。ソシタ
ラネ クマサンガネ トラックネ トラックニ ヒカレチャッタノ。ウサギサン
モ; (年少, 3歳10)

○コレ クマト ネズミガネ オイカケッコ シテンノ。ソイデネ マダ オイカケ
ッコ シテンノ。ソイデ クルマニネ ツキトバサレチャッタノ。(年中, 5歳1)

○ネズミガネ ニゲテ キマシタ。クマガ オイカケテ キマシタ。オオドオリニ
デマシタ。ソシタラ トラックト ショウトツシテ シマイマシタ。(年長, 6歳
1)

接続詞を使っているが、前にものべたように、まちがった使用が多い。

4.5 接続助詞と接続詞の両方をもっているもの——これは、年中・年長児とも使っているが年少児には少ない。

- エトネ コレハネ コレト コレガ オイカケテ キテネ／これとこれって何？／クマト ネジュミ。ソシテ ネジュミガネ ピョソツテ トンダノ。ソシテ クマモ シュコシ トンデサ オイカケタノ。シヨシテ トラックニネ ウエ ネジュミガ コウ ナツテテネ クマガ キューツテ ヤツテ ポカーソツテ ナツチャッタノ。(年少, 4歳4)
- クマガ ネズミヲネ エート ミタンダツテ。ネズミハネ ソレヲ ミテネ ニゲタンダツテ。ソシタラ クマガ オイツイタノネ。ソシタラネ ダンプカーガ キテネ ブツカッチャタンダツテ。ソシタラ ネズミハ トビアガツテ ビックリシタンダツテ。(年中, 5歳2)
- クマガネ ネズミヲネ ソ オイカケテタラネ ドウロニネ ネズミガ イツチャッタノネ。ソウシテ ドウロニ キタラネ ジドウシャガ デテキテネ ブツカッチャッタノ。(年長, 6歳2)

4.6 接続助詞「て」+接続詞「それで」の連結をもつもの。

- ウソトネ ダンプカーガ キテネ ソンデ スナ アケタノ。(年少, 3歳7)
- この「ソンデ」は「そのつぎに」の意を持つ「それから」あるいは「そして」のほうが適当である。

- ソシテ センロン トコデ トマツテネ ソイデ アッチニ イッタノ。(年少, 4歳1)
- この「ソイデ」もやはり「そのつぎに」の意の「それから」あるいは「そして」が適当である。

「て」のあとの接続詞の部分が「そして」「それから」の例もある。

- ソレカラ ネズミガネ ニゲテ ソシテ クマモ ニゲタノ。(年中, 4歳1)
- ソレカラネ クマハ (ハシ)ヲ ハシツチャツテ ソレカラ トマツタノ。(年中, 5歳6)

「て+それで」を「ので」あるいは「から」の理由の意のところに使用している例をあげる。

- ネコ [ねこにも見えたらしい] ガネ ネズミヲ ミテネ オッカケテ キタンダケド [たら]ネ ジドウシャハ [が] キテ ソイデ ヒカレチャッタノ。(年長, 6歳6)
- クマサンガ ネズミ ミツケテネ ネズミサン コウイウ クサリノ トコネ トビコエテツテ、クマサン ソレ シラナイデ イツチャツテネ ソイデネ ジドウ

シャニ ブツカッタ。(年長, 5歳8)

しかし、大部分の「て+それで」は、年少児の例のように「それから」や「そして」の意のところにもちがって使用しているのである。以下の例も。

○クマガ ネズミヲ オイカケテテ ソトマデ デチャッテ ソレデ ホドウカラ
ドウロヘ デテ [この「て」は理由の意である。幼児は「から」「ので」を使用せずこのようにのべることが多い。究明したい課題である。] ダンプカーニ ブツカ
ッタノ。(年長, 6歳3)

この絵は、「道路に飛び出た」と「ダンプカーが来た」の二つが、「はね飛ばされる」原因(理由)になっているので、関係づけて話すのがむずかしかったらしい。年齢によって表現のしかたに差はあっても、まだ、原因と結果を形式的に正しく結びつけて話せないのがこの期の大部分の幼児の実態なのである。

5 考察と今後

三コマの絵を見て幼児が話す場合の発話の構造の実態を、発話の数と文数、文と文の連結の構造という観点から見てきたのであるが、これで十分な分析であるとは言えない。特に文と文の連結については、絵の内容を理解しているのだが連結の形式、つまり接続助詞と接続詞の使用法を十分知らないから、正しく言えないのか、内容を理解していないから表現できないのであるかどうかの分析がなされなければならないだろう。今後の研究課題にしたい。